

日本人英語学習者のイントネーションに対する談話の観点からの分析

広島大学大学院 大和知史

0 はじめに

英語の音声指導、特にイントネーションの指導は、近年盛んに叫ばれているコミュニケーションに対する期待や重要視の傾向にもかかわらず、まだまだ研究の余地を残している領域と言つてよいであろう。

これまで、日本人英語学習者のイントネーションの特徴を記述した研究は比較的多く見られるが、教師、学習者はそうした特徴に対してどのような視点をもって取り組むべきか、という点についてはあまり明らかになっていない。そこで、本論では、日本人英語学習者のイントネーションの特徴に対し、「談話」という観点から捉え直しを試みることで、今後のイントネーション指導に対して示唆を導くことを最終的な目標と捉える。こうした最終目標を受けて、本論では手続きとして、以下の3段階を経る。

- 1) 先行研究から導き出された日本人英語学習者の英語イントネーションの特徴に関して、課題点を提起する
- 2) 「談話の観点」からの捉え直しを主張し、筆者の収集した音声資料を記述する
- 3) 記述された特徴を基に、今後のイントネーション指導における課題を提起する

1 日本人英語学習者のイントネーションの特徴 - 先行研究から -

本項において、まず日本人英語学習者のイントネーションの特徴を記述している先行研究を概観する。ここで取り上げる先行研究は、中路 (1993)、杉藤 (1996a; b)、Hosaka (1998)、Togo (1999) であり、それらから日本人英語学習者のイントネーションの特徴をまとめる。

1.1 先行研究

ここでは、上に述べた先行研究の記述に重複が見られるため、それらの中でも包括的な記述であると考えられる Hosaka (1998) を取り上げる。Hosaka (1998) は、日本人英語学習者の英語における顕著な特徴として、1) 卓立の頻繁な使用、2) 平坦調の多用、3) 音調の頻度 (下降>平坦>上昇 [下降上昇、上昇下降])、4) キーや終結の誤用、5) トーン・ユニットの境界の誤用 (113:日本語訳は筆者による) の5点をあげている。さらに、1) においては、a) トーン・ユニットの後ろの方に主調子卓立を置く、b) 卓立を置かないはずの要素に卓立を置く、c) 卓立を不自然な箇所置く、の3点が下位項目としてあげられている (cf. 渡辺 1994; 川越 1999)。また、これらの他に、Togo (1999) による上昇・下降の仕方の不自然さへの指摘 (cf. 中路 1993; 窪菌 1998) などを加味することができる。

1.2 先行研究のまとめ

これら先行研究をまとめると、日本人英語学習者のイントネーションの特徴として、

- 1) トーン・ユニットの過多
 - 2) 誤った境界
 - 3) 卓立の頻繁な使用
 - 4) 音調の偏った使用 (平坦調の過多)
 - 5) 音調の始点、動き方の不自然さ
- の5点をあげることができる (多くを Hosaka (1998) による指摘に拠っていることを付記する)。

一般に、これらの特徴により日本人英語学習者が発する英語は、単調で、非連続的に聞こえることが多いと言われている¹⁾。こうした特徴による情報構造上の影響、ひいてはコミュニケーション上の影響については後述する。

2 先行研究の課題点から「談話の観点」の顕在化へ

上に述べられた先行研究における、日本人英語学習者のイントネーションの特徴は広くコンセンサスを得ていると言える。しかしながら、一方でそれらの記述では捉えきれていない点があることを指摘することができる²⁾。それらは、音声的特徴中心の記述、単文単位の分析、の2点から述べることができる。

2.1 音声的特徴中心の記述

上記の先行研究においては、発話の区切りがどのようなようであったか、ピッチの高低がどのようなものか、といった音声的特徴を記述したものである。しかしながら、それらの特徴の記述は、実際の発話においてどのような機能を果たすのか、に関してはあまり触れられていない。つまり、それらの特徴がもたらすであろうコミュニケーション上の影響について言及していないのである。

もちろん、上記の先行研究においても、イントネーションのコミュニケーション上の影響について全く言及されていないわけではない。例えば、中路(1993)ではイントネーションを意味の前後関係や発話の意図により使いわけるべきであると述べている。しかしながら、筆者がここで主張したいのは、イントネーションによる実際の発話内での影響という視点を明示的に打ち出し、日本人英語学習者の英語の特徴を記述する必要があるのではないかということである。

2.2 単文単位の分析

これらの先行研究における問題点として、ほとんどがそれぞれの分析の際には単文をその単位としている、という点を指摘することができる(Wennerstrom 1994)。Discourse Intonation model (Brazil 1997)を用いている研究である、Hosaka (1998)の場合においても、分析の際には単文を取り出して日本人英語学習者の特徴を述べている。

そこで、具体的にどのような観点から日本人英語学習者の英語を分析するべきかを考察する。先に述べたように、イントネーションがコミュニケーション上果す役割を考慮した場合、少なくとも2文以上の範囲を射程に入れるべきであろう。言い換えるならば、談話の観点から分析を試みる必要があるのではないであろうか(具体的な範囲については2.3を参照されたい)。このような範囲に観点が広がることにより、分析は話者と聴者の関係(社会的、それぞれの持つ共通基盤)、状況との関わりなどを関係づけることとなる。

2.3 「談話の観点」とその意義

2.1、2.2のような課題点を解決する方法として、「談話の観点」からイントネーションを分析することを主張する。ここでは、まず「談話」とはどのようなものかに関して述べ、次に「談話の観点」の意義について論じる。

まず、本論における談話を以下のように捉える。次の引用は、Brazil et al. (1980)における談話の捉え方を表わしたものである。

2人またはそれ以上の間で行われる会話を含む一連の発話 (a sequence of utterances, usually involving exchanges between two or more participants) (島岡、他(編)1999:39; 下線は筆者による)

このように、談話は発話の相互作用として位置付けられていることがわかる、また、引用文中にも見られるように、談話の基本単位をなすものとして、交換 (exchange)³ があげられている。

ここで、交換 (exchange) とは何かを、教室環境に典型的な交換の例で説明する。

(例 1)	Teacher:	Why would you want to be strong?	[initiation]	} exchange
	Pupil:	To make muscles.	[response]	
	Teacher:	To make muscles yes.	[follow-up]	

(taken from Brazil et al. 1980: 74)

この一連の教師 (T) と生徒 (P) のやりとりが 1 つの交換である。この交換は 3 つのムーブ (move) から成り立っており (この 3 つのムーブが Initiation-Response-Follow-up である)、それぞれのムーブは少なくとも語彙項目、句レベル以上であると言える。ここから、Brazil の記述は、交換 (exchange) の構造を対象にしていることがわかる。こうした議論を受けて、本論において取り上げる基本単位は、交換を原則として用いる。すなわち「談話の観点」とは、発話の連続を交換というまとまりをもって見る観点のことを示す。

では、「談話の観点」を用いることで、どのような意義があるのだろうか。まず、イントネーションの果す役割を考慮することで、談話の観点の必要性を述べるができる。Togo (1999) はイントネーションの役割に関して、'What intonation does is to signal the most appropriate communicative value the speaker wishes to see a given sentence take on in a given context (75)' と述べており、ここからイントネーションが与える影響を考慮する必要が出てくる。従って、イントネーションを考察するにあたり、談話という観点は必要不可欠であることがわかる。

また、なぜある特定のイントネーションを用いるのかという疑問を解消することができるのもこの視点から捉えることの利点であろう。イントネーションと統語構造という関係で見るとは、イントネーションと発話のなされたコンテキスト、発話者の意図との関係を考慮に入れるにはこの観点が必要になるからである (Cauldwell and Hewings 1996; Thompson 1995)。

3 談話の観点 - 特に情報構造に関して -

ここでは、「談話」の持つ構成要素の 1 つとして情報構造に焦点を当てることを述べ、今後の分析の枠組みとして用いる。

一口に談話の観点とは言え、関連する要素は多岐にわたるであろう。情報構造、ターンの授受、さらには発話行為や発話のまとまりの中でのピッチ変動などが考えられる。本論においては、特に「情報構造」に焦点を当てる。理由は以下に述べる通りである。

Celce-Murcia et al. (1996) は、Allen (1971) のあげたイントネーション指導に関する 4 つの留意点⁴が 90 年代にも通用することを受けた上で、さらに 2 点を追加している。それらは、「情報構造、対比の理解」、「母語と英語との違いを認識すること」の 2 点である。前者に関して Celce-Murcia et al. では、以下のように記述している。

using the notions of given and new information - or contrast, where relevant to explain shifting focus in ongoing discourse (i.e. the speaker will emphasize contextually salient information and will deemphasize what is given or predictive) (Celce-Murcia et al. 1996: 218)

また、Levis (1999) の述べるように、明示的な文脈の中での指導やある程度の一般化の可能性から考えると、情報構造は、イントネーション指導を考える上でも重要であり、かつある程度の体系性を持ちうると考えられる。このことから、本論においては「情報構造」に焦点を当てる。以下に、イントネーションの情報構造的機能を概観する。

3.1 イントネーションの情報構造的機能

イントネーションの informational function は、発話の連続における焦点の推移を提示する機能である (Couper-Kuhlen 1986)。例えば、新情報・旧情報、対比等を提示する働きのことである。イントネーションはトーン・ユニットという情報単位に区切られる。その中で卓立 (特に主調子音節) の位置が情報の焦点を提示するのである。

また、Tench (1990) によるイントネーションの情報構造的機能の記述からは、Halliday による言説を多く取り入れていることが特徴的である。

there is an informational role, which involves tonality (distribution of information), tonicity (focus of information), and tone (status of information: falls for major information, rises for incomplete, and minor information, and fall-rises for thematic marking and implications) (Tench 1990: in summary).

引用文中の tonality, tonicity, tone という用語に着目する。それらつまり、それぞれ順にトーン・ユニットの境界の置き方、卓立 (特に主調子音節) の位置、音調の選択、を指すことがわかる。これらの組み合わせにより、発話の情報構造が示されるのである。

上にあげられた順、すなわちトーン・ユニットにおける卓立 (境界の置き方と卓立をまとめたもの)、音調の順に、それらの示す機能を概観する。

(例 2) (Did you have a good day?)

I had a bloody HORRible day

(例 3) Jane found it EASY to settle to married life / whereas John found it DIFficult

(Cruttenden 1997: 81-83; 筆者により音節単位での表記に修正)

例 2 においては、'day' は旧情報であるため、卓立 (主調子音節) は 'HORR' に置かれる。例 3 では、'easy' と 'difficult' とが新情報でありかつ対比しているためそれぞれに卓立が置かれる。

また、音調による情報構造の提示は Brazil et al. (1980) から例示することができる。彼らによれば、下降調 (および上昇下降調) により新情報を、下降上昇調 (および上昇調) は情報を話者と聴者との間で既に共有されているものとして提示するとしている。以下を参照されたい。

(例 4) a) //↘ when i've finished MIDDlemarch // ↘ i shall read adam BEDE //

b) //↘ when i've finished MIDDlemarch // ↗ i shall read adam BEDE //

(taken from Brazil et al. 1980: 14)

例 4 においては、a) では聞き手には私が 'Middlemarch' を読んでいることは周知であり、次に何を読むかが新情報として提示されている。b) では次に読むものは 'Adam Bede' であることは既知であるが、いつ読むのか、何の後に読むのが新情報として提示されている。このように、選択する音調により情報の価値が示されるのである。

これまでに述べた、イントネーションの情報構造的機能をまとめたものが、以下の表 1 である。

表 1 イントネーションの構成要素とそれが表わすことから

構成要素		情報構造の観点から表わすことから	
トーン・ユニット		情報のまとめ	
卓立		情報の焦点 (特に主調子分節素)	
音調	宣言的音調 (下降調、上昇下降調)	新情報	分岐
	指示的音調 (下降上昇調、上昇調)	旧情報	収斂

4 談話の観点から見た日本人英語学習者のイントネーションの特徴

これまでの議論を受け、筆者の収集した音声資料により、「談話」の観点から、特に情報構造に焦点を当てた考察の実例を示す。なお、記述の方式は Brazil (1997) に準ずる。

4.1 被調査者・手順

被調査者は、1) 英語専攻の大学生 (1年生 23名)、2) 英語専攻の大学生 (4年生 1名)、の計 24名である。すべて、日本語を母語とする者であり、日本の中・高等学校において英語教育を受けている。本論では、彼・彼女らを日本人英語学習者とみなして考察を行う。

いずれも準備されたダイアログを「できる限り自然に」読む形式で録音を行った (参考資料 1 を参照されたい)。いずれの被調査者群に対しても、ダイアログを前もって渡し (録音の 2、3 日前)、十分に慣れておくように指示し、単語等に関する質問には答えるようにした。被調査者群 1) は 2人 1組でダイアログを読み、その後役割を入れ替えもう一度読む形式を取った。被調査者 2) は、ダイアログを 1人 2役でダイアログを読んだ。

分析は auditory 中心とし、確認作業の一環として acoustic な分析を行うこととした (cf. Wichmann 2000)。その際の分析ソフトは、「Kawai PROT」、「音声録聞見」を用いた。

4.2 卓立に関して

ここでは、卓立に関連する特徴を順に概観する。「トーン・ユニットの数」、「語強勢の誤用」、「卓立の配置による情報構造の誤提示」、「文末の卓立配置」、の特徴が見られた。

◆ トーン・ユニットの数、語強勢の誤用

全ての音声資料に共通していたのは、トーン・ユニットの一つ一つが非常に短い (あるいはトーン・ユニット数が多い) ということである。ここで、この現象が、被調査者が情報構造について知っていた上でのことなのかどうかは窺い知れない。しかし、情報のまとまりをあまり考慮していないと考えられる例が以下のように見られる。

(例 5) B: //sounds like //too much trouble//

A: //then //there's //a day //once a month //for // bulky //rubbish collection//

例 5 の特に A は、短く、情報のまとまりを考慮しているとは思えないトーン・ユニットが多い。話者のためらいが多くあるものと認識され、聞き手の興味をそいでしまう可能性があるであろう。

また、卓立の置かれた語において語強勢を誤ることで、語そのものの認識を誤る可能性がある。例えば、'improvement' において 'prove' ではなく、'ment' に強勢を置くものが見られた。

◆ 情報構造の誤提示、文末の卓立配置

Hosaka (1998)、Goh (2000a; 2000b) らに述べられている特徴同様、被調査者も卓立を置く頻度が非常に高い。先に述べられているように、トーン・ユニットの数が多ければそれだけ卓立の数も多くなるのは自然のことではある。しかし、卓立が情報の焦点を示すとすれば、焦点が数多く示されることで、聞き手がどこに情報の焦点があるのかを認識する際、混乱する可能性が高くなる。

次に、旧情報に卓立を置く例として、以下を参照されたい。

(例 6) A: //↑THERE's a REALly NEAT //↘ WESTern //→that's PLAYing//
//→right DOWN to//↘DOWN the STREET //

B: //↑i HATE// ↘WESTerns//⁵

例 6 においては、直前の A による発話において既出であり旧情報である 'Westerns' に、卓立が置かれている (さらに言えば新情報を提示する宣言調を用いている)。これにより、聞

き手は共通基盤にある情報が新情報として提示されることで混乱を覚える可能性がある。

(例 7) A: //ʔi JUST //ʔREAD aBOUT //ʔan INteresting foreign FILM
//→COming //ʔto the PLEASant STREET //ʔTHEAter//

B: //ʔi DON'T understand //ʔFOreign FILMS //

例 7 においては、A と B による交換から映画の種類に焦点を当てるべきであることがわかる。しかしながら、この被調査者は、ほぼ全ての語に対して卓立を置いており、発話内のどこに情報の焦点があるのか (tonicity) が明確にならないことにより、聞き手は話者の伝えたい情報の焦点をつかめない、といったコミュニケーション上の弊害が出る可能性がある。こうした傾向は被調査者群 1) 14 名からも見られた。さらには、例 6 同様、旧情報であるはずの 'films' に卓立が A、B どちらの発話においても置かれている。

(例 8) B: //ʔyou SEparate THEM // (NS: //ʔyou SEparate them //)

A: //ʔYES // ...

さらに、上記の例 8 における B の記述からわかることは、各トーン・ユニットの最後の語に卓立が配置される傾向にあることである。新情報であり疑問の対象である 'separate' に卓立が置かれ、さらにはそこから音調の移動が始まるはずであるが、被調査者の多くは 'them' に卓立を置いている。これにより、聞き手にとって、新情報に焦点が向きにくくなるであろう。

4.3 音調に関して

音調に関して、「平坦調の多用」、「宣言的音調を旧情報に、指示的音調を新情報に使用」、という特徴が見られた。それらを順に考察する。

◆ 平坦調の多用

平坦調の多用が被調査者に見られた。Hosaka (1998)、Goh (2000a; 2000b) ちに指摘されている通り、このことにより談話内の情報を伝達することが困難となるであろう。以下に例をあげる。

(例 9) B: //→ I thought //ʔit was a RUBbish BIN //

A: //ʔIS it IS //→ but it's for BURnable RUBbish //

例 9 から、A に注意された B は自身を正当化するため 'I' に卓立を置き、しかも新情報であるため下降調、あるいは強調を加味して上昇下降調を用いることが考えられるが、このダイアログを用いた被調査者 23 名の内 19 名が上述のように平坦調を用いている。さらに、B の発言を受けた A も、確かにごみ箱であるということを確認した上で、新情報である「可燃物」に焦点を当て下降調または上昇下降調を用いることが考えられるが、同様に 16 名が平坦調を用いていた。このことから、被調査者は、ダイアログ中の新情報・旧情報の区別をつけずに発話を行っていたことがわかる。

◆ 宣言的音調を旧情報に、指示的音調を新情報に使用

被調査者は、特に情報構造に関して、新情報・旧情報の区別をつけていない、あるいは情報を音調として具現化できていない点が指摘される。新情報に用いられるはずの宣言的音調を旧情報に使用している例はその典型である。これに関しては、先の卓立の項で述べた "I hate Westerns" の 'Westerns' に下降調が用いられている例を参照されたい。

(例 10) A: //ʔunBURnable STUFF //ʔgoes in THIS BAG //

例 10 から、新情報である 'unburnable' および 'this' には焦点が当てられず、共に共有事項に焦点が当てられ宣言的音調が用いられている。こうすることで、それぞれ 'stuff' や 'bag' に焦点が置かれ、聞き手はそこに注意を向けることとなり、話者の意図との齟齬が生じるであろう。

他の例として、以下を参照されたい。これは逆に、新情報に旧情報を示す指示的音調が用いられているものである。

(例 11) B: //ㄨㄨHOW's my ACCENT//

A: //ㄨㄨWHAT do you THINK//

例 11 の交換では、まず 'you' に卓立が置かれておらず、音調が下降上昇調である。この音調は、A と B との間で共通理解がなされているとみなされるときに使用する音調である。しかし、この交換自体の意味するところは、「あなた自身はどう考えているのか」を改めて問い直すものであるため、'you' に卓立を置き、さらにそこに下降調の音調を付すのが自然であると考えられる。

4.4 まとめ

これまで見てきた日本人英語学習者のイントネーションの特徴とその発話中における影響をまとめたものが、以下の表 2 である。

表 2 情報構造から見た日本人英語学習者のイントネーションの特徴とその影響

	日本人英語学習者の特徴 (2.1のまとめより)	日本人英語学習者の特徴 (本論中の記述より)	考えられる情報構造上の弊害
トーン・ユニット	1) トーン・ユニットの過多 2) 誤った境界	トーン・ユニットの誤用	情報のまとまりの誤認
卓立	3) 卓立の頻繁な使用	文末の卓立配置	焦点を当てるべき要素に注意 がいかない
		情報構造を無視した卓立	旧情報と新情報とを混乱する
		語強勢の誤用	語自体の認識を誤る
音調	4) 音調の偏った使用	平坦調の多用	どこに情報の焦点があるのかが わからない
		旧情報に下降調を用いる 新情報に上昇調を用いる	聞き手が旧情報と新情報とを 混乱する 新情報を聞き逃す

(Goh 2000b: 10 を参考に本論の議論をまとめ、筆者が作成)

このように、表中左に示される日本人英語学習者のイントネーションの特徴を談話の観点、細かく言えば情報構造の観点から捉え直すことで、表中中央のように彼らが持つ特徴が記述され、表中右のように考えられる情報構造上の問題点が浮き彫りになった。こうした問題点を受け、実際の指導に際しての教授目標、項目を設定することが必要となるであろう。

5 今後のイントネーション指導への課題

以上のように、日本人英語学習者のイントネーションの特徴をこれまで行われてきたように音声的特徴から記述するのではなく、「談話の観点」、特に情報構造の観点から、それら音声的特徴に対し捉え直しが可能であることを主張し、筆者の収集した音声資料から実例を示した。

音声的特徴の記述のみでは、指導に際して視点をどのように持てばよいのかが分かりにくい、このように「談話の観点」を顕在化させることで、談話の観点からの指導を可能にすると考える。

こうした「談話の観点」からの指導を行うことで、以下の点をカバーすることが可能であろう。

- 1) イントネーション指導の焦点化
- 2) 発話の構造の認識を促す (聴解への可能性、さらには産出への可能性)
- 3) なぜそのようなイントネーションになるのかという理論的根拠を提供できる
- 4) 談話を考慮したイントネーションに関する教材、タスク作り (拙論 1999)

総括すれば、イントネーションを指導することは音声的知識を与えることというよりもむしろ

発話がどのように組み立てられているのかを認識することを指導することなのかもしれない。最後に、本論では触れることのできなかつた、イントネーションと発話行為、ターンテイキングなどとの関係については、今後の課題とし、本論を締め括る。

註)

1. 日本語からの影響として、語強勢中心の発音、音節言語としての日本語、などがあるとされている (Hosaka 1998; 杉藤 1996; Togo 1999)。
2. これまでに述べた特徴の記述自体が批判の対象になっているのではない。Hosaka (1998) 等が記した日本人英語学習者のイントネーションの特徴に関する記述に対する正しさ等に関して批判しているわけではないことに注意されたい。
3. Brazilのイントネーション理論の訳語は吉村、貫井、鎌田 (訳) (1999) に準ずる。
4. Allen (1971) による4つのイントネーション指導に関する留意点を以下に記す。
 1. Direct students' attention to a few major patterns;
 2. Alert students to differences between the punctuation system and the intonation system;
 3. Distinguish between the intonation of isolated sentences and the intonation of segments in extended discourse;
 4. Teach students to think in terms of the speakers' intention in any given speech situation (Allen 1971: 73) .
5. 参考資料に提示するダイアログとは異なるが、記述は本人が発したものに忠実に行っていることに注意されたい。
6. さらに、1.2においてまとめた、5) 音調の動きの不自然さ (語末で急激に上昇する)、という特徴もここに現れていることを指摘しておく。

参考文献

- Allen, V. (1971) . Teaching intonation, from theory to practice. *TESOL Quarterly*, 4, 73-91.
- Brazil, D., Coulthard, M. and Johns, C. (1980) . *Discourse Intonation and Language Teaching*. London: Longman.
- Brazil, D. (1994) . *Pronunciation for Advanced Learners of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brazil, D. (1997) . *The Communicative Value of Intonation*. Cambridge: Cambridge University Press. (originally published in 1985) .
- Cauldwell, R. and Hewings, M. (1996). Intonation rules in ELT textbooks. *ELT Journal*, 50, 327-334.
- Celce-Murcia, M., Brinton, D. M. and Goodwin, J. M. (1996) . *Teaching Pronunciation: A Reference for Teachers of English to Speakers of Other Languages*. New York: Cambridge University Press.
- Coulthard, M. (1985) . *Introduction to Discourse Analysis*. London: Longman. (吉村昭市、貫井孝典、鎌田修 (訳). 1999. 『談話分析を学ぶ人のために』. 京都:世界思想社.)
- Couper-Kuhlen, E. (1986) . *An Introduction to English Prosody*. London: Edward Arnold.
- Cruttenden, A. (1997) . *Intonation*. 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dauer, R.M. (1993). *Accurate English: A Complete Course in Pronunciation*. Englewood Cliff, N.J.: Prentice Hall.
- Goh, C. C. M. (2000a) . Discourse intonation features of New Englishes and implication for English language curriculums. Presentation handouts at 35th RELC International Seminar. 17-19 April 2000.
- Goh, C. C. M. (2000b). A discourse approach to the description of intonation in Singapore English. In Brown, A., Deterding, D. and Ee Ling Low. (eds.). *The English Language*

- in Singapore: Research on the Pronunciation*. Singapore: Singapore Association for Applied Linguistics.
- Hosaka, H. (1998). Discourse intonation in English and Japanese of Japanese EFL speakers: a pilot studies. *ARELE*, 9, 107-116.
- Levis, J. M. (1999). Intonation in theory and practice, revisited. *TESOL Quarterly*, 33, 37-63.
- Tench, P. (1990). *The Roles of Intonation in English Discourse*. Frankfurt: Peter Lang.
- Thompson, S. (1995). Teaching intonation on questions. *ELT Journal*, 49, 235-243.
- Togo, K. (1999). *A Study of Pedagogical Phonetics: With Special Reference to English Intonology*. Tokyo: OtowashoboTsurumishoten.
- Wennerstrom, A. (1994). Intonational meaning in English discourse: a study of non-native speakers. *Applied Linguistics*, 15, 399-420.
- Wichmann, A. (2000). *Intonation in Text and Discourse: Beginnings, Middles and Ends*. Essex, Harlow: Pearson Education Limited.
- 川越いつえ. (1999). 「発音指導に使える活動」. 『英語教育10月増刊号』. 48, 18-19.
- 窪菌晴夫. (1998). 『日英対照による英語学演習シリーズ1 音声学・音韻論』. 東京:くろしお出版.
- 島岡丘, 栢矢好弘, 原口庄輔 (編). (1999). 『<英語学文献解題 第6巻>音声学・音韻論』. 東京:研究社出版.
- 杉藤美代子. (1996a). 「日本人の英語-イントネーションとリズムの特徴」. 『日本人の英語-日本語音声の研究 2-』. pp. 185-194. 大阪:和泉書院.
- 杉藤美代子. (1996b). 「英語のアクセントとイントネーションの教育の試み」. 『日本人の英語-日本語音声の研究 2-』. pp. 331-344. 大阪:和泉書院.
- 中路信子. (1993). 「日本人の英語-その韻律的特徴に関する一考察」. 名古屋短期大学研究紀要. 31, 103-112.
- 大和知史. (1999). 「英語教科書におけるイントネーション表記-中学校検定教科書における表記とイントネーションの取扱い-」. 中国四国教育学会・教育学研究紀要. 第45巻. 第2部. pp. 133-138.
- 渡辺和幸. (1994). 『英語のリズム・イントネーションの指導』. 東京:大修館書店.

参考資料

1 ダイアログ

ダイアログ 1 から 3 は被調査者 2) に、ダイアログ 4 は被調査者 1) に課したものである。

1. Would you like to see a movie?

- A: Would you like to see a movie?
- B: I'd love to. What kind of movie were you thinking of?
- A: There's a great horror film playing at the mall.
- B: I don't like horror films.
- A: How about a Woody Allen film?
- B: I've seen them all.
- A: There's a really neat Western that's playing right down the street.
- B: I hate Westerns.
- A: I just read about an interesting foreign film coming to the Pleasant Street Theater.
- B: I don't understand foreign films.
- A: Well, what do you like? I thought you wanted to see a movie.
- B: Are there any cartoons playing? I just love Walt Disney.

2. May I help you?

- A: May I help you?
B: Yes. I'm looking for something to give my best friend for his birthday.
A: What's your price range? Are you looking for something cheap or something special?
B: Something special, of course.
A: We have some imported ties on sale this week. They come in shades of blue, green, red, or purple. Each is a unique design, and they only cost \$125.
B: No, I don't think so.
A: Well, would you be interested in a cashmere sweater or some fine leather gloves?
B: No, I don't think either would be appropriate. You see, my friend is a dog.
A: What did you say? Your friend is a dog?
B: Yes. You know, man's best friend.

3. How's my accent?

- A: Come in, Peter. How are you?
B: Fine. Mrs. Sweet, I'd like to ask you an important question. You'll answer it honestly, won't you?
A: Well I'll try.
B: How's my accent?
A: What do you think?
B: I've studied hard in your course, but I don't know.
A: I think you've made a lot of improvement.
B: Improvement? But do I sound like an American?
A: Not exactly. But you will some day. There's still the question of those final consonants. And then there's your grammar and your vocabulary... And of course your sentence structure could be improved...and sometimes....

Three dialogues above are taken from Dauer (1993)

4 Dialogue "recycling"

- A: B(name), please don't put empty cans in there.
B: Sorry. I thought it was a rubbish bin.
A: It is, but it's for burnable rubbish. Unburnable stuff goes in this bag.
B: You separate them?
A: Yes, and we have different collection days for them, too.
B: Sounds like too much trouble.
A: Then there's a day once a month for bulky rubbish collection.
B: When the next collection day?
A: Tomorrow, why?
B: I want to go and see what the Japanese throw away!